



ある日交差点から見た日本社会

屈 艳 品
QU YAN PIN

私は松本市に住んでいます。この町は人口が多いし、車もいつも込んでいて、とても賑やかな城下町です。今回話すのは私が日本に来たばかりのときにあった事です。今思い出しても昨日の事のように目の前に浮かんできます。ある休みの日に、私は自転車を乗って、町を走り回りました。とある交差点を渡ろうとしたとき、遠くから救急車のサイレンの音が響いて、すぐ目の前に走ってきました。ちょうど赤信号で車や人が道を横断している最中でしたが、車や人がぴたっと止まって、道を空けました。その瞬間、タイムストップしたような中を救急車はスピードを落とすこともなく、スムーズに混雑な交差点を走り抜けていきました。救急車は道を譲ってくれた皆さんに「ありがとうございます」と言いました。その場面を見た私はとても深い感銘を受けて、気持ちが長いこと静まらずに、そのまま、しばらく立ちっぱなしでいました。

その後、職場の日本人の同僚にそのときの事を話しましたが、同僚は全然驚かず、「それは当たり前なことだよ」と私に言いました。そうですね、それは日本人にとってはごく普通のことですが、私にとっては不思議でたまらないことでした。「救急車に道を譲る」のはどこでも常識です。でも、私の国ではその常識が通用しないことをしばしば目にします。そのせいで、命を助けられないこともあるようです。

日本は公益マナーの教育を幼稚園から実行しています。各マスメディアも社会に対する公益広告をよくしています。そのおかげで、マナーを守ることが自然にしみ込んでいるのでしょう。日本での2年間の生活を通じて、度々感じたことは皆さんが相手のことをよく考え、理解して、相手を思いやることです。これに対して、私の国では社会マナーや公德心においてまだまだ改善すべきことがたくさんあるのを痛感します。このようなことから成熟した日本社会を見ることが出来ます。その日、救急車で運ばれた患者さんはきっと助かったと強く信じます。なぜならば、日本の皆さんはその患者さんに命の通路を繋いだからです。

私の日本での3年技能実習生活は終りに近づいてきました。残りわずかな時間にもっともっとたくさんのことを学び、帰国後、日本で学んだすべてのことを家族や友人、知人に話し、伝えます。私の国も一人ひとりが少しずつ行動すれば、より良い社会に一步、進めると思います。